新安沈船中の七里鎮窯瓷器についての略論

「略談新安沈船中的七里鎮窯瓷器」
『中国古代窯址調査発掘報告集』1984収録

作者：薛　　翹　陳　文華
訳者：楢崎彰一　熊　海堂

1976年、南朝鮮木浦市付近の新安海底から一艘のわが国元代の沈船が発見された。この沈船から引き揚げられた文物には、1万点余りの瓷器があるが、三点の高麗瓷器を除くと其の他はすべて中国の瓷器である。これは世界の考古発掘中の重大な発見である。

この一群の瓷器に対して、国内外の多くの学者が研究を進めているが、大部分の瓷器については、その所属する産地を正確に探し当てている。しかし、宋元時代のわが国の瓷器の分布は広く、窯や品種も多いため、発見できないものもあると思う。1977年、国外で発行された一書である三和出版社の『新安海底文物－新安海底文物特別展図録』があるが、其の図録に発表された文物中、いくつかの作風の比較的特殊な黒釉瓷器があるが、それを焼いた窯はまだ発見されていない。即ちそれは図録カラー版30・31、黒白版235～238の「黒釉乳頭文小壷の瓷器」と名付けられた4点である。

この4点の瓷器の形は大体同じで、高さ8.8－15㎝、口径8.7－14㎝あり、開いた口と肥厚した口縁、真直ぐな頸部、膨れた胴部をもった丸底の壷形をしている。表面には黒釉を施すか、或は無釉の露胎のものがあり、刻劃旋渦紋で飾っている。その共通した特徴はすべて頸部に白釉円点紋をめぐらしていることである。此の種の瓷器はまだどのような図録にも見ることができず、其の窯を確定することができないため、原図録では「吉州窯？」と捉えているが、作者自身にも自信のない事を示している。

此の種の瓷器を吉州窯と捉える事は間違いである。既に発表されている資料や我々の実地調査の状況からみれば、吉州窯の黒釉磁の装飾芸術は釉掛け、刻花、彩絵と貼釉に特色があり、民間の切り紙芸術の装飾法を用いた貼釉の器は吉州窯の典型的な製品である。しかし、上述の乳頭紋或は刻劃旋渦紋で飾った製品はめったに見られない。此の種の瓷器は吉州窯では余り見られず、かえって吉州窯から南へ200㎞離れた贛州七里鎮の西区の僅かばかりの堆積層から此の種の瓷器の残欠や破片をよく拾うことができる（図1の1・2）。採集された標本には沈船の中の器物の造形、釉色、模様が同じであるばかりでなく、大きさもみな非常によく似ているものがある。例えば我々の採集した一点の、高さ12㎝、口径10.7㎝の黒釉の壷（図1の3）と、図録中の図版235の「黒釉乳斗文小壷」（高さ12.9、口径10.7㎝）（図1の4）は極めてよく似ている。また、別の一点の黒釉鼓釘文の壷に融着した残片は其の口径8㎝（図1の5）あるが、それと図録中図版237の「黒釉乳斗文小壷」（口径8.8㎝）（図1の6）ともよく似ている。これによって我々は新安沈船文物のこの黒釉瓷器は七里鎮窯の製品であって、吉州窯の製品ではないと思う。

七里鎮窯は贛州市の東郊にあり、宋元時代に江西省南部で黒釉瓷器を盛んに焼いていた窯場の1つである。調査資料によると、七里鎮窯は唐代の後期に既に1種の蟹青色をした瓷器を焼き始めていた。しかし、此の種の青磁の堆積の範囲は比較的小さく、大部分の堆積は宋元時代に属す

する。かつて北宋時代、七里鎮窯は精美な刻花青白磁を焼いていたが、南宋以後、小量の無文の白磁を焼き続けた以外には、主に黒釉磁に取って替わった。この様な状況はこの磁窯が生産を停止する元代までずっと続いた。

七里鎮窯は南宋から黒釉磁の焼造を開始したが、これは南宋の政権が政治の中心を移し、南方の人口が急増したことと関係がある。「贛州府誌」の記載によると、南宋の紹興年間、贛州に属していた客戸は49,715戸に達し、北宋の熙寧年間の16,509戸に比べると、正に三倍に近い増加である。人口の増加によって、日常生活必要品は不足した。瓷器の生産量を引き上げ、市場の必要

図一　七里鎮窯址と“新安沈船”の器物

1, 2.　七里鎮窯黒釉露胎旋渦紋鼓釘壷　　3, 5.　七里鎮窯黒釉鼓釘紋壷
7.　七里鎮窯黒釉露胎旋渦紋鼓形壷　　8.　七里鎮窯黒褐釉鼓釘文碗
9.　七里鎮窯褐黒釉鼓釘文三足炉　　10.　清江南宋墓黒釉露胎旋渦文鼓釘壷

を満たすために、七里鎮窯は製品の品種を改め、採掘しやすい質の悪い瓷土を用いて瓷胎原料を作り、吉州窯の黒釉技術を引いてきて、白さの足りない胎質の弱点を補った。我々は七里鎮窯の黒釉磁の色沢といくつかの製品から、はっきりと吉州窯の影響をみることができる。

七里鎮窯の素朴な黒釉磁の中で、白釉円点と刻劃旋渦文の装飾が最も突出しており、七里鎮窯の最も代表的な製品と言うことができる。この種の黒色あるいは茶褐色の釉の上に白色の円点で飾る手法は吉州窯の貼花・劃花と釉掛けの新技法と区別されるもので、七里鎮窯の製品中、鼓形壷と口の開いた碗と三足炉に見ることができる（図1の1～9）。此の種の点釉装飾は七里鎮窯の黒釉磁の内の一種の重要な技法の特色である。発見された実物標本からみると、此の種の乳頭文は殆ど器物の頸部或は口縁部にきちんと並んで付けられている。其の装飾部位と配列は楽器の打釘とよく似ている。此の鼓形壷は、上下に均しく白色の点彩を巡らしていて、一個の瓷鼓を形取ったもののようである。これによって、七里鎮窯のこの種の黒釉磁の上にある白釉の点の飾りを「鼓釘紋」と呼んでおり、沈船図録で此の種の装飾を「乳頭紋」を呼んでいるのは不適切であると思う。

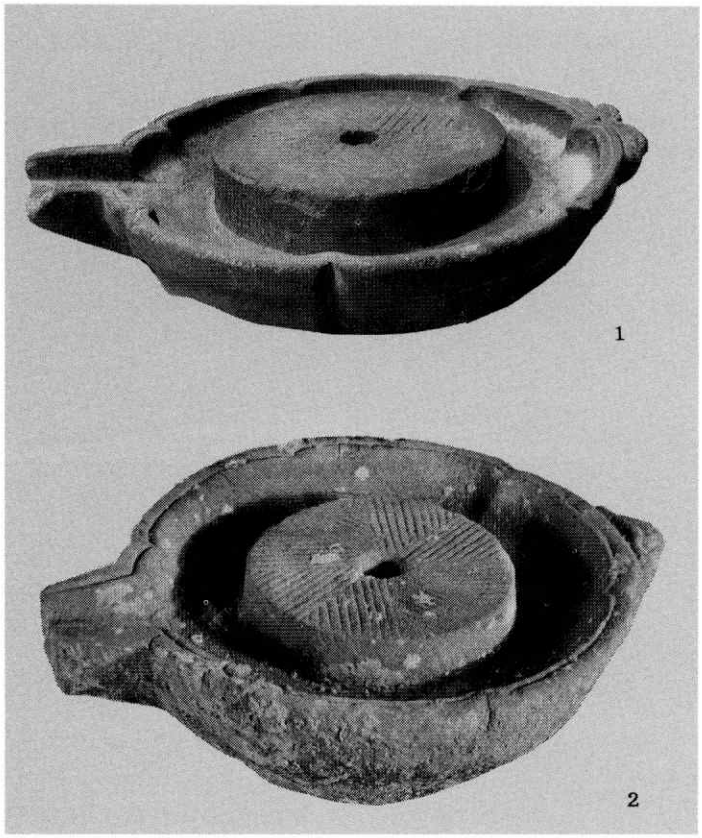
1976年、江西省清江県昌付公社のソン湖大隊で一基の南宋の墓が発見されたが、出土の1個は高さ 6.2㎝、口径 7.2㎝の七里鎮窯の黒釉鼓釘旋渦紋壷（図1の10）であり、これと江西省の南宋墓にいつも見られる影青合子・魂瓶が伴出しており、宋の乾道年の紀年銘のある墓誌が出ている。従って、鼓釘紋装飾は七里鎮窯においては、南宋代に初めて出現したと見ることができる。沈船中の一個の黒釉乳頭文小壷（図1の6、沈船図録237）は七里鎮窯の同期の製品と全く同じである。元代の沈船から発見された宋代の瓷器は少し前の時代の製品であり、当時国際市場で大変よく売れていたものである。既に発表されている沈船瓷器から見て、すべて宋代の比較的高い価値を有する芸術瓷であり、例えば景徳鎮窯の影青の臥女瓷枕や吉州窯の彩絵長頸丸胴瓶（李徳金「朝鮮新安海底沈船の中の中国瓷器」『考古学報』1979年2期　図盤壱拾弐2,4）と七里鎮窯の黒釉乳頭文壷がそうである。

此の種の鼓釘紋壷は七里鎮窯の簡素な黒釉磁の中では工芸的に比較的複雑で高価な商品である。南宋墓の鼓釘紋壷の発見者である清江県博物館の黄移寿氏が提供したこの墓から出た墓誌の記載によると、墓主は「宜人程氏、朝散大夫□□江南路安撫司参議官劉公椿之夫人――乾道七年庚寅（編者按ずるに：乾道七年（1171）は辛卯に当たる）12月18日に清江城南荆山の左鶴卵岡之原に改葬す」とある。此の種の瓷器は江西省においては宋墓中からまだ発見されたことがないが、高級地方官吏の家族墓の副葬品においてのみ見られるものであって、当時では高価でなかなか手に入れることのできない稀少品であったと云うことができる。

鼓釘紋壷の施釉の状況から見ると、表面に施釉したものと、表面に施釉をしない露胎のままのものとあるが、その内面は口縁の外口唇部まですべて釉を施しており、釉は厚く、釉面は滑らかで、光沢がある。全面に釉を施したのは洗ったり、汚れをとったりするのに便利だからである。清江県の女性の墓から出土したものは墓の主人が生前に愛好した生活上の実用の器物であった。

窯跡の堆積の規模からみると、宋、元時代の七里鎮窯の瓷器の生産は相当隆盛であった。その内、鼓釘紋と刻劃旋渦紋の黒釉磁は当時七里鎮窯が対外貿易品として産出したものである。我々は窯跡から彫刻のある精美な石臼も発見している（図2の1）が、沈船文物図録中の図版293の一個の石臼（図2の2）はその形と大きさが極めて近く、同一時期の製品である。

贛州は江西省南部の重要都市であって、贛江上流の章水と貢水の合流する所に位置している。北側は贛江の水路に沿って真直ぐに南昌に通じており、東及び南側は陸路によって福建省と広東省に通じている。唐代、張九齢は皇帝の命令によって大外嶺官路を開き、贛州と南北水陸交通の中心地とした。贛州の贛南山区には豊富な森林資源があり、造船業の発展のための需要に供された。歴史の記載によると、宋代には贛州は全国十一個所の官営造船場の1つであった。北宋の真宗の時、毎年、四分の1近い漕運船が贛州で造られた(『文献通考』巻二五「国用考・漕運」参照)。したがって、宋元時代の贛州は水運交通が発展し、『贛県誌』に云うところの「仕官商賈、遡彭蠡而上者、日未曽絶」と言った盛況であった。七里鎮は貢水に臨んでおり、貢水は贛州城の北を廻って贛江に注いでいる。此の窯の貿易陶磁の輸出は贛江を北上し波陽湖を経て長江に出、江、浙一帯の港に運ばれて行われた。七里鎮窯で生産されたこの種の貿易陶磁は贛州の中流域の清江県で発見されており、東南方の陸路に沿った各県からは出ていない。このことは水路で運ばれたことの証拠である。



図二　石臼

1. 七里鎮窯址出土　2. 新安沈船文物

いま、七里鎮窯の瓷器が発見された新安沈船はわが国元代に沈船が浙江省の明州(いまの寧波)から出発したもので、温州や或は更に南の福建省の泉州と広東省の広州からとは考えられない。

七里鎮窯の鼓釘紋壷の貿易は日本の製陶業に対して大きな影響を与えた。日本の山梨県熱見村出土の此の種の鼓釘紋壷は日本の学者が「褐釉擂座小壷」と呼んでいるものである。また、日本の愛知県瀬戸市七曲窯からも鎌倉ー室町時代(中国の元明時代に相当する)の倣制品(1975年に東京国立博物館で発行された『日本出土の中国陶磁』東京国立博物館1975年。参照)である。この種の瓷器は日本人民の大いに歓迎するところであった。従って、新安沈船は中国から日本に向かう貿易船であったと思われる(参考に示す。日本の学者は瀬戸市七曲窯生産の倣制品を「中国磁州窯」の倣制品と云っているが、「中国七里鎮窯」の倣制品と改めるべきである。

かつて、江西省の古代の貿易陶磁の窯は、一般には景徳鎮窯と吉州窯が知られるだけであった

が、いま、七里鎮窯の貿易陶磁が発見され、宋、元時代のわが国の貿易陶磁の分布状況と中国と外国との文化交流の研究にたいして新しい珍貴な資料を提供した。

付記　本文中の挿図については鮮明化を期するため贛州地区博物館の龍年海氏より提供して戴いた原版を利用した。記して厚く謝意を表する。